「忘れ名」

2010/08/28

ぱっ、と。
はじけるように、瞼を開いた。
まず自分が立っていることに驚いて、その次にあたりが晴れていることに驚いた。
結局何に驚けばいいのか、最後には何を思えばいいのか、さっぱりわからなくなってしまった。まずは思考を見失った。感覚と記憶と、それから自分自身さえも、見失った。
自分がどうしてこんなところにいるのか、そんなことさえ分からないのだった。
今までどこにいたのかも分からなかった。ただ身体の奥底、どこか深いところに引っかかるようにして、静まり返った暗いイメージばかりが渦巻いていた。
何も分からない空白の中で、しばらく途方に暮れることになった。途方にくれたまま、ぐるりあたりを見回した。
晴れ渡る空に覚えはなくて、ああ、とため息じみて深呼吸。

「あ、あー。あー、あー、あー！！」
喉はかすれた調子だったけど、すぐに大声を出せるようになった。
びりびり声帯の震える感覚がおかしくて繰り返した。
いくら騒いでみても何も返らない、本当に、晴れた空以外は何もないようなところだった。

「おのの、いもこ」
喉に引っかかっていたような言葉を吐き出してみた。
もしかしたら名前なのかもしれないって思って、何度も、何度も何回も吐き出してみた。
吐き出しても吐き出しても、自分の中からなくなっていかない言葉だったから、きっとこれが自分の名前なんだって思った。
おのの、いもこ。

「いもこー！！」
腹の底まで震えるみたいで、ただただ、笑った。
何だか笑っていなければ、泣いてしまいそうに思えたから。

これが、今より少しだけ前のことだ。

ぐるり空を見渡してみて、さてどうしようと今さらながらに悩んでみた。
ちょっと喉の奥が疲れた感じだ。まあ、あんなに大声出し続けていれば当然か。
単純に声を出すだけの時間は何にもなくて、声の伸び具合だの喉やら腹の底やらが震える感じを確かめたりと、楽しいものであったけれれど、じわじわと落ち着かない心地になってきた。
何せ自分のことがわからない。名前はわかったけれど、それ以外が割と空白だ。
ただひとつ、思い出した名前がある。それがまるでたったひとつの道しるべのように、導いていってくれるような気がするのだ。

まず思ったのは会えるんだってこと。それがすぐに会うんだ、という決意に変わる。それは理由もなくふわりと自分の中でわき上がった思いだったけれども、言葉として頭の中を巡らせてみれば、最初からそこにいたように、当たり前のように神経を通じて心のどこかに落ち着いた。
そんな感じがした。
例えるなら冬の寒い日に、あたたかいお茶を飲んだときのような。
ほっと息をつきたくなる熱が、舌をやいて痛みを残すのに、腹の底におさまってしまえばどうしようもなく落ち着きを生む。身体の一部となって熱となって、当たり前にそこにあるような。
疲れ果ててしまうような時間を過ごした気がするのに、それは思い返せばあっという間であった気もする。
天気だけはのんきにのどかな場所だった。時折風が吹いた。日差しのあたたかさに対してつめための、清々しい風だった。
何となく、むき出しの腕をさすっていた。さむいわけではなかった。むしろちょうどいいくらいだった。
だけど物足りなさが落ち着かないような心地に繋がって、何となく、腕に触れてさすっていた。
口を開いて息を吸い込む。
吸った分を相殺するように吐き出して声にする。
声はどこまででも届く、真っ直ぐに伸びて、いなくなる。
早く早くと急く心を、たしなめるように声を吐いて、また、単純に名前を届ける作業に没頭する。

どこに届くかも分からないで。
そこに、僕の、探し人があるともわからないで。

そんなことにも飽きてしまって、次はとにかく適当に歩いてみることにしたのだった。
晴れ渡る空は気分が良くて、仰向けにひっくり返って昼寝でもしてみたかったけれどそれは我慢することにした。
晴れていた。空が青かった。馬鹿みたいに。青く晴れ渡って透る空。空気のように透明で、深呼吸ひとつで何もかもに手が届きそうな気がした。
今まで知らなかったくらいに、空っぽの気持ちで空を見続けることができた。
そうか、こんな色があったのか、としみじみしてしまうくらい青く、馬鹿みたいにきれいな空だ。
でもなんで馬鹿みたいなんて思うのだろうかと不思議にも思った。きれいなのに。きれいなのにそんな変な言葉で。

まあ、いいか。
そんなことよりも今は、足元にまとわり付いてくる犬のほうが問題だ。
ふかふかと長い毛並みのせいなのか、それとも元から太っているのか、とにかく丸い犬だった。色は白。空に浮かべてやったらちょうどいい具合の雲になれそうだ。
しゃがみ込んで、やや乱暴めに首周りをかき回してやった。犬は嫌がったりしなかった。そのことにちょっと感動して、もっともっと撫でてやる。触ってみれば毛並みが長くてやや太り気味。犬はうれしそうに、ばったばったと尻尾を振り回していた。
そうやって構ってやっているうちに、どんどんかわいく見えてくる。

「どうした。君、どこから来たんだ？　ひとりなの？」

わん、ときゃん、の間くらいの高い音で犬が鳴いた。
それからあっという間に身を翻して真っ直ぐ駆けていってしまう。
ほんの少しさみしい気分でいたら、離れたところから一度、犬が振り返ってまた高い声で鳴く。

「何、呼んでるの？」

ぱったぱったと尻尾が行ったりきたりする。

離れたところで犬がじっと見上げてくる。

「どこかに連れて行ってくれるのか？」

また一声、犬が鳴いた。

いつの間にか口元が笑んでいた。そのことを意識してやれやれどっこいしょ、と犬を撫でるためにかがんでいた体を起こした。

ゆっくりと犬についていくことにする。

どうせ他に、行く当てなんて思いつかない。

何せ今はひとつ名前を思い出せただけで、それ以外のことはさっぱりだ。

てろてろ歩いて犬に追いついたら、犬はまた駆け出していった。

距離が開いたところで振り返って、またじっと待っている。

「ここ掘れワンワン、とか」

自分で言ってなんだか笑えた。犬は笑わない。笑わないし何も言わない。

でも駆けていっては待って、走って、また待って。

どこに連れて行ってくれるんだろと、ほんのりと楽しみになってきた。

馬鹿みたいに晴れた空の下を、犬といっしょに歩いていった。

どうしようもなく疲れてしまったので、ひたすらに、二本の足を交互に動かすことに集中している。

当てがあるわけではないが、よく言うじゃないか。犬も歩けば棒に当たる、と。

その棒が探し物であるなんて大した幸運だとしか言えないおめでたい思考だが、それでも何もしないよりはましだと思う。

呼びかけることには疲れてしまったので、今度は黙々と歩く。淡々と歩く。

ざりざりと、足の裏を地面にこすり付けるような歩き方。ざくざくと音が立つ、本当は僕は、こんな子供じみた歩き方の方が好きだった。

そういえばずいぶんとこんな風に歩いていなかった気がする。ついでに背中から力を少し抜いてみた。真っ直ぐに伸ばしていなくとも、どうせ、誰にも見られない。咎める人など

いないのだ。
この世界に僕ひとりなんじゃないかって、そう、錯覚できるくらいに何もない世界だ。
一本道が続いている。道の周りは草原だ。短い草が生えそろっていて、風が吹くたびさわさわ揺れる。遠くの方には木も。まるで平和を絵に描いたような場所だ。家だとか、そういう人の気配は一切なかった。
道は真っ直ぐじゃなかった。意味もなくゆるりと曲がっていた。
草原を突っ切って歩いても良かったけれども、何となく、道に沿って歩いていた。茶色の踏み固められた地面の上を、土埃を巻き上げるようにしてざりざりと。
そうして単調に足を、交互に前に出すことにばかり集中していると、何だか色々なことを思い出せそうな気がしてくる。
こんな風に抜ける青空。春先のまだ冷たい空気。日の出前の凍える風。凍てゆるみ潤んで見える星月。青白く見えるのは元来の血色の悪さか光源の遠さかはたまた僕の受けとり方の問題か。
やせたように見える頬とか。
細くなってしまった手とか。
それでも変わりのない、相変わらず気の抜けた目元やゆったりつり上がる口の形とか。
瞬きの拍子に、ふいと、意識が飛ばされる。

死なないでねってあんたは言った。
恨むからって笑って。
誰があんたのために死ぬものかと意地のように思っていた。
誰が、あんたのために泣いてやるものか。
あんたは嘘吐きだ。僕を置いて遠くにいく。そうやって、遠くにいくための準備ばかりを整えていく。
僕の気持ちはどうなるのだろう。想いや時間を省みずに、あんたは自分の周りだけを綺麗に片付けていく。
誰が、あんたのためになど。
そう強く苛立っていなければ、きっと泣いてしまいそうだった。

それからお疲れ様と男が言う。
どこか別の場面だった。
冗談みたいな帽子をかぶった、冗談みたいに笑った男だった。
あまりにも嘘くさかったから、逆に真実味はあったのかもしれない。
そのときの僕は男の言葉を素直に受け入れ、大した驚きも

混乱もなく、自分の置かれている状況を受け入れた。

何かしたいことは、と男が聞く。

僕はそれよりも傍に立つ、頭に角を生やした少年のことが気になって仕方がなくて、だって角だ。人間だろうか？　人間に見える。でも角だ。じゃあ人間じゃないのか。

そういえばこの男も、人間に見えるけれども、もしかしたら違うのかもしれない。

何しろここはあの世なんていう、冗談みたいだけれども本当にある場所らしいので。

上の空のまま頭の中に居座っていた、ひとつの言葉を吐き出していた。

ゆっくりと目を細めた、男が愉快そうな表情をしたからというわけではないが、その単語を口にした途端、その音はしっくりと僕の中に落ち着いてああこれが唯一信頼できる僕の中で最も大切な事象なのだと納得した。

男は笑う。冗談みたいな笑みよりも深く、楽しげに愉快そうに酷薄に。

それじゃあ、探しに行くといい。

気付けばふらりと足元が揺らぎ、僕の記憶は少し飛んで、こんな、馬鹿みたいに平和などこかに立ち尽くしている。

そしてこうして、今に至る。

ざりざりと歩く音が子守唄のように一定で慕わしい。

逆巻きの記憶を散らかしながら、繋ぎ合わせてまた壊す。

時間の感覚が曖昧で、色々な思い出がごちゃごちゃだ。

それでも全てに共通するある人を僕は、きっと探している。

歩いている。

僕以外何もなさそうな場所なのに、きゃん、と高く鳴く声が、響いた。

当然僕は振り向く。

何かの予感を伴って風が吹きつけて、僕は鳥肌でも立ちそうな感覚を押しとどめて、腕をさすっていた。

道の遠くの向こうから、白いふわふわしたかたまりが飛ぶようにして近付いてくる。

かがんでそれに手を差し出した。

わん、とそいつははっきり鳴いて、真っ直ぐに胸に飛び込んでくるから少しだけ体勢を崩しそうになる。

けれども相手は小さな犬だった。思った以上に懐っこいその犬に驚きながら、気付けばわしわしと長めの毛をかき回すようにして撫で回していた。

おーい、と遠くから声が、した。
何かを自覚する前にまず、心が痛いくらいに跳ねた。
道の遠くの向こうから、へろへろと、走り寄って来る人影を認めて僕は、腹立たしいような気持ちを抱える。
そうでもしないと、なんだか泣いてしまいそうだった。

私を待っていてくれたはずの犬が突如として猛然と、駆け出していって少し焦った。
ひとり取り残されるかと思った。
最初はひとりだったのに、二人から、ひとりにされるという想像はひどく肌寒いような不安を生んだ。
おい、と叫んだ声が上ずった。
きゃん、だかわん、だか鳴いた犬は振り返ることなく、あっという間にずいぶん遠くまで行ってしまう。

もともと小さい犬なのだ。だから小さく見えるのは当然で、だけどそれがそのままもっと小さな点になって、もう見つけることもできなくなってしまいそうで、一生懸命に走ったと思う。
焦る気持ちとは裏腹に、身体はちっとも前に進まない。のろのろと足を動かすだけで精一杯だ。おまけにすぐに疲れてしまう。どうしてだろうかとさらに焦る。必死に右足を前、左、右、ただひたすらに繰り返して、泣きそうな気持ちを誤魔化している。
胸の奥が締め付けられそうに痛い。
なんだろう、何か、何か予感がする。
それが一人ぼっち、置いてけぼりの予感なのかそうでないのかも判別できないまま、一生懸命に足を動かした。
ひとりになりたくない。
ひとりにしないで。

……お願いですから、置いていかないでください。
声にならない声を、いつかどこか、聞いた気がした。

「太子！！」

道の遠くの向こうから、駆け寄ってくる人を見た。

何かに強く、打たれたように立ち尽くす。
その人のことを、いつか、どこかで見たことがある。
ような、気が、した。

赤い、なぜか袖のないジャージを着た青年の足元には、まとわり付くようにして白い犬がついてきていました。
じゃれるように足元で戯れる犬をやさしくなでて、赤いジャージの青年は立ち尽くしている、青いジャージを着た男に向き直りました。
青いジャージの方はきちんと長袖でしたが、それを着た男はまるで寒いとでも言うように、不安そうに腕をさすっていました。

「たいし」

青年はうれしそうに、まるで堪えきれないとでも言うように弾む声で名前を呼びました。
対して男は不安そうな、悲しそうな顔をしたままで、うつむいてゆるく首を振りました。

「君は誰……違う、知ってる？　違う……」

ぶつぶつと男は呟きます。何を言っているかまでは、青年には聞き取ることができませんでした。
男は考えていました。ぐるぐると頭の中を、身体の一部、もしかしたら胸の奥、心とでもいうような場所、そんなところを騒がせて、落ち着かなくさせてくるこの気持ちの正体はなんだろうと。
男は目の前の青年が誰だか分かりませんでした。
それが、この世で何よりも悲しいことのように感ぜられて、いっそこの場から逃げ出してしまいたいくらいでした。

「おのの、」

その言葉を思い出せたのは偶然なのか、必然なのか。
喉の奥がつまるような息苦しさを感じて、気がつけば何度

も口にした、その言葉を囁いていました。

「いもこ」

ひゅ、と青年が短く息を吸い込みました。
一瞬の間に色々な表情を見せました。瞳が不安に揺れました。じわりと水の膜が目を覆いました。ぐ、と引き結んだ唇が、すぐにゆるんで困ったように眉を下げました。
驚きに瞠った目をゆるりと細くして、それからため息のように、答えました。

「それは……僕です」
「え？」
「呼んでください」

男はおそるおそる視線を上げました。
まるで泣き出しそうな表情に、胸の奥を引き絞られるような痛みを感じました。

この感覚を知っていると思いました。
私はこれを知っている、男は無意識に、震える息を吐き出しました。

「……いもこ」
「はい」
「いもこ？」
「はい」

青年は少しだけ目を閉じました。
開いて、滲むような、複雑な笑みを浮かべました。

「はい、……太子」

男は自分でも認識しない衝動に突き動かされて、真っ直ぐに青年にぶつけるように、腕を伸ばして抱きしめました。
ぐいぐいと額を肩口に押し付けて、ぎゅうぎゅうと、きつくきつく抱きしめました。

「……ね、言ったでしょう。僕は、あんたなんかのために死にはしませんよ」
「うん、……うん、」
「でもね、忘れなかったでしょう」

「うん、うん……」
「……忘れないで、くれたんですよね？」

男はぐりぐりと頭を動かして、どうやら頷いているようでした。
青年はされるまま、ゆっくりと腕を持ち上げて男の背中をなでました。
軽くたたくようにして、ゆっくりと、やさしく背中をなでました。

「僕は、約束を守りましたよ。だから、今度はあなたが……
……」

絵に描いたような平和な世界で、ひとりひとりが二人になって、ぴたりと体をくっつけるように抱きしめあって、それから顔を見合わせて、困ったように、笑い合いました。
二人の足元で白い雲みたいな犬が、わん、と高い声でひとつ、鳴きました。

そんな、ひとりとひとりの。
終わってしまって、そしてまた始まるかもしれない。
そんな二人の話でした。

馬鹿みたいに晴れ渡る空、抜けるように青い空。